

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.27 2025年4月28日発行



巻頭言

『ゴールボール体験記』

齋藤崇志（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）

〔巻頭言〕
『ゴールボール体験記』
齋藤崇志

〔特集〕
『協力隊OBのキャリアパス』
河野眞
大西海斗

〔連載：研究万華鏡〕
『研究は誰のために-Patient
and Public Involvement
(PPI)-』
佐久間善子

〔コラム：世界のめがね〕
『南米チリのリハビリテ-
ーション事情』
高橋佳太郎

ゴールボールというスポーツをご存じですか？視覚に障害のある人を対象に考案されたパラスポーツの1つです。バスケットボールコート2/3くらいの大きさのコート上で、鈴が入ったバスケットボール大のボールを2チームが転がし合い、得点を競います。選手は「アイシェード」と呼ばれる目隠しを装着し、全盲状態でプレーします。

先日、このゴールボールの体験会に、初めて参加しました。アイシェードによって、私は全盲状態になります。コート上で耳を澄ますと、ボールの中の鈴が様々な音を奏でています。自分に近づいてくる音、遠ざかっていく音、自分から見て右に転がる音、左へ転がる音、バウンドしている音。この音を聞き分けることで、見えない状態であっても、転がるボールのスピードや位置を把握し、ボールをキャッチすることができます。人間が持つ聴覚の鋭敏さに驚かされます。また、ゴールボール素人である私は、時折、自分がコート上のどの辺りにいるのか分からなくなり、コート上で迷子になりました。自分の位置が分からなくなる—それは目が見える状態では経験したことが無い恐怖や不安に似た感覚であると同時に、まるで知らない惑星に置き去りにされたかのような不思議な感覚でした。

体験会への参加は、初めて経験するスポーツを純粋に楽しむ機会であったと同時に、視覚に障害を持つ方が捉えている世界の一端を垣間見る機会となりました。新年度、何か新しいことに挑戦することで新たな気づき、ひらめき、経験が得られるかもしれません。

【特集】

協力隊OBのキャリアパス(第1回/全2回)

本号の特集では「協力隊OBのキャリアパス」というタイトルで任期を終え帰国した元JICA海外協力隊のキャリアについて取り上げました。2025年10月発刊予定のvol.29と併せ全2回シリーズでお届けいたします。本号では現在大学教員と開発コンサルタントとして活躍するお二人にご執筆いただきました！



【河野眞さん】



【大西海斗さん】

キャリアパス①『 ひらく・うけとる・つなぐ・ひろげる 』

河野眞（国際リハビリテーション研究会代表、国際医療福祉大学）

リハ職が国際協力分野でのキャリア形成を考える時、現在その選択肢は、海外協力隊を始めとするJICA関連、国際協力NGO、開発コンサルティング会社、病院丸ごと輸出に取り組む医療法人、海外の医療法人などさまざまな形で広がっています。しかし、自分が青年海外協力隊（当時）で派遣されていたマラウイから2002年に帰国した当時、リハ職にとっての国際協力分野のキャリアはJICA関連以外に選択肢がほとんどないといっていた状況でした。

帰国直後の7月から年度一杯はなぜかアイリッシュパブのバーマンとして働きながらも、自分としては、引き続きリハ職の専門性を活かしながら国際協力に携わりたい、そしてその場合、特定の一国ではなくさまざまな国に関わりたい、そのためにはどうするか、と考えを巡らせていました。「リハ職の専門性を活かしたい」と思ったのは、専門性の切り口を通してこそ世界はより面白く輝くと考えていたためです。また、自分は〇〇国の専門家になりたいのではなく国際協力の専門家になりたいのだと思っていたため、「さまざまな国に」と考えていました。ただ振り返ると、当時の傲慢さと偏狭さが匂うようです。今はもちろん、専門性とは異なる総合性の面白味や意義を知ると同時に、特定の国に長く関わることの必要性も理解しています。

ともあれ、これは昔も今も変わらず言われていると思いますが（本当かどうかは知りませんが）、国際協力畑で生きていくには学位が必要ということで、国際協力を学ぶ大学院を探し始め、その遍歴の中でたまたま大学教員の職を得ました。そしてその後25年間、教員として勤務しながらリハ分野の専門家として活動して来た国は9か国、この5月に行く予定のウクライナで10か国になります。かつての自分の思惑をある程度達成できたといえるでしょうか。



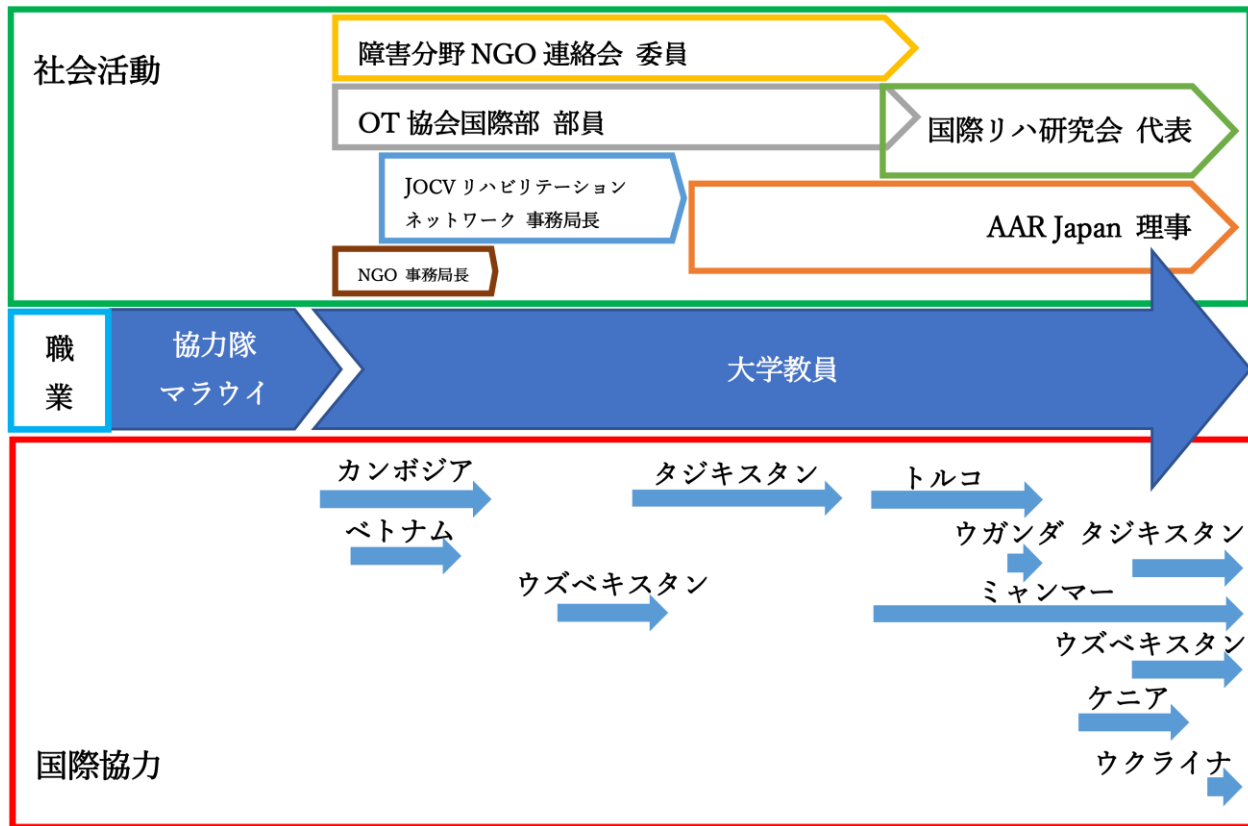
こうして曲がりなりにも自分の思いを実現できたことには、何しろ運の良さがあったと思います。折々に運良く出合った人々やタイミングの助けがなければ、こういうキャリアを歩めていなかったことは間違いありません。その意味でこれまで自分に機会を与えてくれた人々やタイミングに心から感謝しています。

ただ同時に、運をつかむチャンスを最大化するため、意識的に国際協力関連の活動に触れる機会へ自分を「開いてきた」ことも事実です。つまり、リハ関連の国際協力に関するさまざまな勉強会・イベント・活動に首を突っ込み、その中で、「リハ分野の国際協力に関心のある河野という人間がいること」を知ってもらうよう努めました。すると、少しずつ国際協力関連の仕事に声がかかるようになってきましたが、そこで意識したのは決して依頼を断らず出来る限り「受け取る」ことです。仕事を全力で受け取った後は、その仕事を次の展開へと「繋ぐ」ことも意識しました。仕事を受け取って次の展開に繋ぐことが出来たら、引き続き仕事が回って来るかもという利己的な思惑があったのです。更に、ここ10年ほどは自分が受けた仕事に他の人を巻き込んで「広げる」ことを意識しています。自分を踏み台として他の人が国際協力のキャリアを積むことで、巡り巡って自分に仕事が回って来るかもというこれまた利己的な思惑含みです。



ただ、「繋ぐ」と「広げる」はあまり効果的に進んでいません。提案通りに事業が展開したのに呼ばれないとか、巻き込んだ人がその先に広げてくれないとか、いろんなことが起きています。とはいえ、10年以上前に共に働いたウズベク人が現地保健省の活動に巻き込んでくれるなど、長い目で見るとリターンもあるようで、やはり、繋いで広げることは大切だと実感する面もあります。

これからキャリアを作る皆さん、ひらく・うけとる・つなぐ・ひろげるという意識は必ず皆さんの世界を大きくすると保証します。もちろん、河野にも新たな仕事が回って来るかもという思惑も含めつつ。



【河野真さんのキャリアパス】

キャリアパス②『 #可能性 #らしさ #居場所 』

大西海斗（国際リハビリテーション研究会事務局、開発コンサルタント）

【原点：ベトナムでのボランティア活動 – 無力感からの出発】

私が国際協力の道を志した原点は、ベトナムでのボランティア活動にあります。インクルーシブ教育や地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）、母子保健活動に夢中で取り組んでいたある日、ベトナム南部の小さな村で15歳の少女と出会いました。彼女は寝たきりで、家のベッドで過ごし、学校には通えず、外出の機会はほとんどない、家族もまた十分に働きに出られていないという現実、私は「理学療法士として、何ができるのだろうか？」と自問しました。



彼女はとてもにこやかな笑顔を見せてくれましたが、私には、家の中での遊びや活動、ハンモックでの過ごし方、ポジショニングや使えなくなっていた車いすの調整、介助の工夫といった、手の届く範囲でのアドバイスを伝えることしかできなかったのです。それらが有効であったことは確かですが、狭義のリハビリテーション—身体的なアプローチや彼女の周りの環境への配慮だけにとどまっている自分に、根本的な解決に繋がれる力がないと痛感しました。この無力感は大きな転機となりました。自身の限界を実感するとともに、問題の本質をもっと広い視点で捉えなければならないと深く思い、その後のキャリアに大きな影響を与えることとなりました。

【日本での気づきと「遊viva」の立ち上げ—遊びと場所が生む可能性】

帰国後、日本の現場で同じような課題に直面しました。「障害があると、遊ぶ場所が本当に限られているんですね。」あるご家族がふと漏らした言葉です。この言葉をきっかけに、子どもたちやその家族が、安心して遊び、つながれる場所や機会を作るために、「遊viva」というボランティア団体を立ち上げ、活動を始めました。賛同してくださる方は多く、イベントを行う際には県行政や社会福祉協議会、企業の協力のもと、毎回200人近くの子どもや家族、全国からボランティアが集まるようになりました。またこうしたイベントや場づくりに加え、少人数での公園やプールへのお出かけ、いちご狩りやBBQといった、日常の遊びやお出かけも企画し、「地域で暮らすこと」「子どもたちが自分らしくいられる場」を大切にしてきました。



【ウズベキスタンでの経験—視野の拡大】

その後、私はJICA海外協力隊としてウズベキスタンへ。改めて「障害」を医学的視点だけではなく、社会経済、社会保障、国際開発など広い文脈で捉える必要があると気付かされます。

現地では、障害児やその家族、スタッフとともに過ごし、社会の価値観や制度、文化の違いを学びました。この経験は、私が帰国後に大学院で開発学(障害と開発)を軸とし障害学や家族社会学を学ぶきっかけとなりました。



【開発コンサルタントとして—経験を形に】

これらの経験を経て、現在は大学院博士課程での研究と並行して、開発コンサルタント(専門家)として、JICAの技術協力プロジェクトを通じた病院運営や医学教育の支援、医療体制の強化などに取り組んでいます。限られた期間と予算の中で確実に成果を出すことが求められるシビアな世界ですが、それだけにやりがいも大きく感じています。



これまで私は、子どもたちの「可能性」「らしさ」「居場所」を広げることをモットーに活動してきました。しかし気づけば、私自身が子どもたちに可能性を広げてもらい、私らしさを見つけ、居場所を作ってもらっていました。目の前の疑問や違和感、課題をただただ追いかけてきたこれまでの道のりでしたが、これからはより一層、自分自身に対して自覚的に、批判的に、そして反省的に歩みを進めていきたいと考えています。どの国、どの地域であっても、人と人とのつながりがすべての根底にあるということ、そして、「する/される」という主体と客体の一方向的な関係ではなく、相互主体的な関係の中で、丁寧な対話を通じて、私にできることを一つひとつ取り組んでいきたいと思っています。

（開発コンサルタントとしての業務）

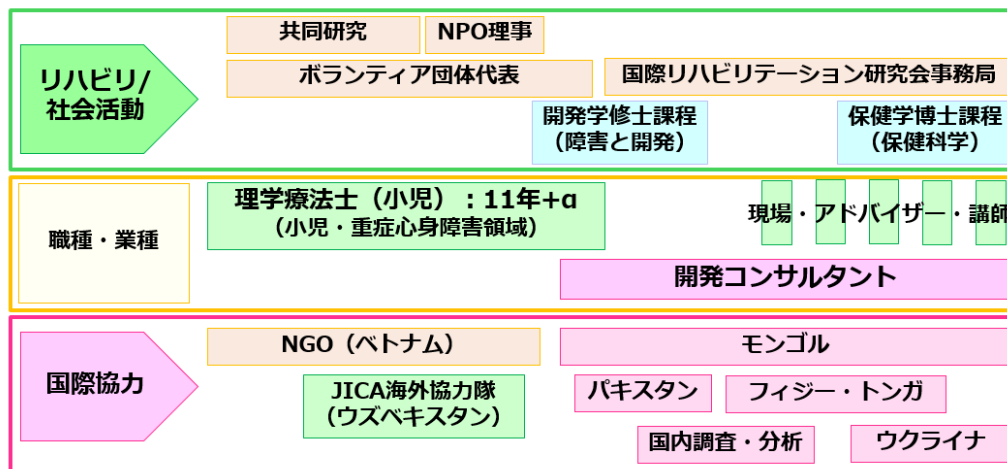
フィジー、トンガにおけるJICA技術協力プロジェクト、障害主流化調査、その他パキスタンやASEAN地域の調査等。現在は、モンゴルの大学病院における病院運営や医学・看護教育、共同研究の体制確立に向けたJICA技術協力プロジェクト、ウクライナに関する調査業務に従事している。

（これまでの主な経歴）

小児分野の理学療法士、NGO運営委員、NPO理事、ボランティア団体代表、JICA海外協力隊、開発コンサルタント

～開発コンサルタントとは～（海外コンサルタンツ協会より）

国際協力の現場には、国連や世界銀行、日本のJICA（国際協力機構）などの機関が関与している。彼らは国別・地域別の視点から開発プロジェクトを企画・運営し、全体の方向性を示す「開発援助の演出家」とも言える。一方で、開発コンサルタントは、専門的な知見と経験をもとに、現場での調査や実践的な支援を行い、具体的な課題解決に貢献するパートナーである。開発コンサルタントが対象とする仕事は幅広く、国際協力の高度化・複雑化に伴い、開発コンサルタントの役割はますます重要になっている。



【大西海斗さんのキャリアパス】



【連載】研究万華鏡*

Inspiration for your research

研究は誰のために

Patient and Public Involvement (PPI)

Nothing about us without us（私たちのことを、私抜きに決めないで）－ 2006年に障害者権利条約が制定された際に合言葉として使用されたこのスローガン。今や政治的・社会的機会損失を説明する文脈でも広く使用されるようになったこの言葉ですが、医学・臨床研究に関わる者がこの概念を理解し、どのように推進できるのかは近年非常に重要な議題となっています。本日はご紹介させていただく Patient and Public Involvement (PPI) は、研究が研究者による・研究者のためのものにならないよう、患者・市民の声（患者・家族・元患者・未来の患者等）・経験を参考にして研究を行うことを掲げたアプローチです。The UK Public Involvement Standards Development PartnershipはPPIに関して以下のように述べています：

“Research being carried out ‘with’ or ‘by’ members of the public rather than ‘to’, ‘about’ or ‘for’ them.
－ 研究は患者・市民に対して (to), 患者・市民について (about), 患者・市民のため (for) に行われるものではなく、患者・市民らと共に (with), 患者・市民によって (by) 行われるべき”

研究への患者・市民参画と邦訳されるPPIですが、研究の立案やデザイン結果の解釈から社会実装に至るまで、その活躍の裾野は留まるところを知りません。「研究をどのように実臨床に役に立てられるのか?」「研究が患者・サービス当事者の生活をどのように変え得るのだろうか?」まだまだ研究経験が浅い私自身が常に抱えているこんな悩みを一緒に考え、伴走してくださっている、そんな心強い研究チームの一員でもあります。

研究を始めてみたい。でも自分の研究テーマが何に役に立つのか検討もつかない。そんな方こそ是非、ご自身が考えているアイデアに関して患者さんやそのご家族とお話しする機会を設けてみるのはいかがでしょうか。その方達との対話を通じて研究を行う意義や課題、そしてサービス当事者の方達のためのRQの種が見つかるかもしれません。

(London School of Hygiene and Tropical Medicine 佐久間善子)

【コラム】『世界のめがね』

世界中で活躍を展開している
会員のめがねを通した
世界の姿を各号お届けします



【湖で家族と過ごす
利用者】



【自作の起立台で
リハビリを行う様子】

チリ共和国(以下、チリ)は、南米大陸の西側に細長く伸びる国で、公用語はスペイン語です。地震や火山活動が活発なため、防災対策が進んでいる一方、豊富な銅資源を背景に南米屈指の経済発展を遂げています。

医療制度は、公的医療保険(FONASA)と民間医療保険(ISAPRE)の二重構造になっており、所得によって受けられる医療サービスに差が生じています。リハビリテーションの分野では、慢性疾患の増加や高齢化に伴い需要が高まっていますが、特に公的医療機関では、医療職の不足や待機患者の増加が課題となっています。

私は現在、JICA海外協力隊の理学療法士としてチリに派遣され、現地のリハビリセンターで活動しています。印象的だったのは、利用者家族の関与が非常に強いことです。障害を負った利用者に対し、家族が積極的に介護を行い、退院後も家族がリハビリを支える姿がよく見られます。日本とは異なる文化を肌で感じる瞬間です。一方で、介護保険といった制度が存在しないため、主に女性や子供が中心となって介護をしなければならず、そのような慣習はチリ国内でも問題視されはじめています。

異国の地での経験を通じ、リハビリテーションの在り方について改めて考えさせられる日々を過ごしています。

(JICA海外協力隊、チリ派遣 高橋佳太郎)

【お知らせ】

【国際リハビリテーションセミナー2025・第8回通常総会開催】

テーマ：開発コンサルタントとしての国際協力～セラピストからの転身～

詳細→<https://int-rehabil.jp/news/events/2025/post-572/>

開催日：2025年6月22日（日）13:30～16:00

開催方法：オンライン開催（ZOOM）

参加費：無料

※総会の成立にあたっては、会員の皆様の出席または委任状の提出が必要です。

【国際リハビリテーション研究会第9回学術大会】

日程：2025年12月14日（日）

テーマ：グローバルヘルスにおけるリハビリテーションの挑戦

会場：東京都内

皆様の一般演題発表、参加をお待ちしております。

編集後記

国際保健の分野に足を踏み入れたい・生涯の仕事にしたい。そんな思いを持った方達にとってとても勇気や希望をもらえる回だったのではと思います。私自身も自分が歩んできたキャリアパスを如何に次の世代にとって再現性のあるものに出来るのか、引き続き模索し続けようと決意を新たに致しました。

(佐久間善子)

特集にもあったように、先人たちも、無数の出会いや試行錯誤を重ねながら、今の実績を築いてきました。私も、大御所や若手とのご縁を大切にしながら、成長していけたらと感じる—そんな“中堅”の今日この頃です。

(寺村晃)

事務局 編集担当

大西 海斗（開発コンサルタント）

長田 真弥（株式会社メディファール）

佐久間 善子（London School of Hygiene and Tropical Medicine）

高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊、チリ派遣）

寺村 晃（大阪保健医療大学）

成田 徹平（東北大学病院）

濱田 光佑（愛知医療学院短期大学）

古川 雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

JSIR HP

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局
jsir.office@int-rehabil.jp

